

-----  
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ  
(例) 鼓《つづみ》

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号  
(例) 七|顆《か》の

[ # ]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定  
(例) “ [ # 「 “ 」は下付き ]

-----

温泉宿から鼓《つづみ》が滝《たき》へ登って行く途中に、清冽《せいれつ》な泉が湧《わ》き出ている。  
水は井桁《いげた》の上に凸面《とつめん》をなして、盛り上げたようになって、余ったのは四方へ流れ落ちるのである。  
青い美しい苔《こけ》が井桁の外を掩《おお》うている。  
夏の朝である。  
泉を繞《めぐ》る木々の梢《こずえ》には、今まで立ち籠《こ》めていた靄《もや》が、まだちぎれちぎれになって残っている。  
万斛《ばんこく》の玉を転《ころ》ばすような音をさせて流れている谷川に沿うて登る小道を、温泉宿の方から数人の人が登って来るらしい。  
賑《にぎ》やかに話しながら近づいて来る。  
小鳥が群がって囀《さえず》るような声である。  
皆子供に違ない。女の子に違ない。  
「早くいらっしゃいよ。いつでもあなたは遅れるのね。早くよ」  
「待っていらっしゃいよ。石がごろごろして歩いて歩きにくいのですもの」  
後《おく》れ先立つ娘の子の、同じような洗髪を結んだ、真赤な、幅の広いリボンが、ひらひらと蝶《ちょう》が群れて飛ぶように見えて来る。  
これもお揃《そろい》の、藍色《あいいろ》の勝った湯帷子《ゆかた》の袖《そで》が翻《ひるがえ》る。足に穿《は》いているのも、お揃の、赤い端緒《はなお》の草履である。  
「わたし一番よ」  
「あら。ずるいわ」  
先を争うて泉の傍《そば》に寄る。七人である。  
年は皆十一二位に見える。きょうだいにしては、余り粒が揃っている。皆美しく、少々《やや》なまめかしい。お友達であろう。  
この七|顆《か》の珊瑚《さんご》の珠《たま》を貫くのは何の緒か。誰《たれ》が連れて温泉宿には来ているのだろう。  
漂う白雲の間を漏れて、木々の梢を今一度漏れて、朝日の光が荒い縞《しま》のように泉の畔《ほとり》に差す。  
真赤なりボンの幾つかが燃える。  
娘の一人が口に銜《ふく》んでいる丹波酸漿《たんばほおずき》を膨《ふく》らませて出して、泉の真中に投げた。  
凸面をなして、盛り上げたようになっている水の上に投げた。  
酸漿は二三度くるくと廻って、井桁の外へ流れ落ちた。  
「あら。直ぐにおっこってしまうのね。わたしどうなるかと思って、楽しみにして遣《や》って見たのだわ」  
「そりゃあおっこちるわ」  
「おっこちるということが前から分っていて」  
「分っていてよ」  
「嘘《うそ》ばっかし」  
打つ真似をする。藍染の湯帷子の袖が翻る。  
「早く飲みましょう」

「そうそう。飲みに来たのだったわ」

「忘れていたの」

「ええ」

「まあ、いやだ」

手手手に懷《ふところ》を捜《さぐ》って杯を取り出した。

青白い光が七本の手から流れる。

皆銀の杯である。大きな銀の杯である。

日が丁度一ぱいに差して来て、七つの杯はいよいよ耀《かがや》く。七条の銀の蛇《へび》が泉を繞って奔《はし》る。

銀の杯はお揃で、どれにも二字の銘がある。

それは自然の二字である。

妙な字体で書いてある。何か抛《よりどころ》があって書いたものか。それとも独創の文字か。

かわるがわる泉を汲《く》んで飲む。

濃い紅の唇《くちびる》を尖《とが》らせ、桃色の頬《ほお》を膨らませて飲むのである。

木立のところどころで、じいじいという声がする。蝉《せみ》が声を試みるのである。

白い雲が散ってしまって、日盛りになったら、山をゆする声になるのであろう。

この時 | 只《ただ》一人坂道を登って来て、七人の娘の背後に立っている娘がある。

第八の娘である。

背は七人の娘より高い。十四五になっているのであろう。

黄金色の髪を黒いリボンで結んでいる。

琥珀《こはく》のような顔から、サントオレアの花のような青い目が覗《のぞ》いている。永遠の驚を以《もつ》て自然を覗いている。

唇だけがほのかに赤い。

黒の縁《へり》を取った鼠色の洋服を着ている。

東洋で生れた西洋人の子か。それとも相《あい》の子《こ》か。

第八の娘は裳《も》のかくしから杯を出した。

小さい杯である。

どこの陶器か。火の坑《あな》から流れ出た熔巖《ようがん》の冷《さ》めたような色をしている。

七人の娘は飲んでしまった。杯を潰《つ》けた迹《あと》のコンサントリックな圈《わ》が泉の面に消えた。

凸面をなして、盛り上げたようになっている泉の面に消えた。

第八の娘は、藍染の湯帷子の袖と袖との間をわけて、井桁の傍に進み寄った。

七人の娘は、この時始てこの平和の破壊者のあるのを知った。

そしてその琥珀いろの手に持っている、黒ずんだ、小さい杯を見た。

思い掛けない事である。

七つの濃い紅の唇は開いたままで詞《ことば》がない。

蝉はじいじいと鳴いている。

良《やや》久しい間、只蝉の声がするばかりであった。

一人の娘がようようの事でこう云った。

「お前さんも飲むの」

声は訝《いぶかり》に少しの嗔《いかり》を帯びていた。

第八の娘は黙って頷《うなず》いた。

今一人の娘がこう云った。

「お前さんの杯は妙な杯ね。一寸《ちょっと》拝見」

声は訝に少しの侮《あなどり》を帯びていた。

第八の娘は黙って、その熔巖の色をした杯を出した。

小さい杯は琥珀いろの手の、臆《けん》ばかりから出来ているような指を離れて、薄紅のむっくりした、一つの手から他の手に渡った。

「まあ、変にくすんだ色なこと」

「これでも瀬戸物でしょうか」

「石じゃあないの」

「火事場の灰の中から拾って来たような物なのね」

「墓の中から掘り出したようだわ」

「墓の中は好かったね」

七つの喉《のど》から銀の鈴を振るような笑声が出た。

第八の娘は両臂《りょうひじ》を自然の重みで垂れて、サントオレアの花のような目は只じいっと空《くう》

を見ている。

一人の娘が又こう云った。

「馬鹿に小さいのね」

今一人が云った。

「そうね。こんな物じゃあ飲まれはしないわ」

今一人が云った。

「あたいのを借《か》そうかしら」

慙《あわれみ》の声である。

そして自然の銘のある、耀く銀の、大きな杯を、第八の娘の前に出した。

第八の娘の、今まで結んでいた唇が、この時始て開かれた。

“ [ # 「 “ ” ] は下付き ] MON 《モン》 . VERRE 《ヴェエル》 . N'EST 《ネエ》 . PAS 《パア》 . GRAND 《グラン》 . MAIS 《メエ》 . JE 《ジュ》 . BOIS 《ボア》 . DANS 《ダン》 . MON 《モン》 . VERRE 《ヴェエル》 ” [ # 「 ” ] は下付き ]

沈んだ、しかも鋭い声であった。

「わたくしの杯は大きくはございません。それでもわたくしはわたくしの杯で戴《いただ》きます」と云ったのである。

七人の娘は可哀らしい、黒い瞳《ひとみ》で顔を見合った。

言語が通ぜないのである。

第八の娘の両臂は自然の重みで垂れている。

言語は通ぜないでも好《い》い。

第八の娘の態度は第八の娘の意志を表白して、誤解すべき余地を留めない。

一人の娘は銀の杯を引っ込めた。

自然の銘のある、耀く銀の、大きな杯を引っ込めた。

今一人の娘は黒い杯を返した。

火の坑から湧き出た熔巖の冷めたような色をした、黒ずんだ、小さい杯を返した。

第八の娘は徐《しず》かに数滴の泉を汲んで、ほのかに赤い唇を潤した。

底本：「山椒大夫・高瀬舟」新潮文庫、新潮社

1968（昭和43）年5月30日発行

1985（昭和60）年6月10日41刷改版

1990（平成2）年5月30日53刷

底本には、表記の変更に関する以下の注記が見られる。

「本書は旧仮名づかいで書かれていたものを（中略）、現代仮名づかいに改めた。」

加えて、極端な宛て字と思われるもの、代名詞、副詞、接続詞などは、以下のように書き換えたとある。

...か知ら ...かしら 此 かく 彼此 かれこれ ...切り ...きり 此 これ 是 これ 流石 さすが 併し  
しかし 切角 せっかく 其 その 大ぶ だいぶ ...丈 ...だけ 兎角 とにかく 所で ところで 只管  
ひたすら 迄 まで 儘 まま 矢張 やはり

入力：砂場清隆

校正：松永正敏

2000年8月9日公開

2006年5月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。